

平成31年2月9日(土)

老球の細道462号

## 創造の過程

会津バスケットボール協会 室井 富仁

先日亡くなった元京都市立芸術大学学長で哲学者梅原猛さんの『日常の思想』という本を読んでいたら「創造」について面白い話書かれてあった。芸術家の創造と学者の創造も同じだという。内容の一部を抽出する。

「哲学者ニーチェは、創造の過程について、三つの比喻を用います。創造する人間はまずラクダとなり、次にライオンになり、次に赤子となる。ラクダは重い荷物を背負って砂漠の中を歩みます。ラクダの人生は忍耐であります。創造する人間は、まず、人類が長い間つくった重い文化遺産を担わねばなりません。ラクダの時代というのは徒弟の時代でありましょう。すぐれた創造者になるには、何年かの苦しい徒弟時代が必要です。徒弟時代の中で、彼は、伝統をわがものとするのできるのです。しかし、ラクダだけではだめです。ニーチェはラクダは砂漠の中で、ライオンに変貌するといいます。ライオンは否定者であります。ライオンは、そのうろこの一つ一つに伝統の黄金がかがやく竜と格闘するのだといいます。つまり、伝統の否定であります。これは創造者であるなら、一度は通らねばならない段階であります。多くの伝統を否定し、新しい芸術なり、学問なりをはじめ、そういう決意にもえた青年時代をもたない芸術家は、大した芸術家ではないと思います。しかし、ニーチェは、ライオンの段階だけでは駄目だといいます。ライオンは子供にかなわない。子供は無邪気である。無邪気な子供の心になって真の創造は可能だということです。ライオンはまだ否定にとらわれています。彼が倒そうとする伝統そのものに、彼は否定的にとらわれているのです。まだそれでは駄目です。その否定までのりこえる自由な境地、この自由な境地に到って真の創造は可能であります。」

同じような創造の過程は日本古来の「道」文化にもある。戦国時代の茶人千利休が言った「守破離」である。「守り尽くして、破るとも、離るとも『本』ぞ忘るな」の守破離をとった言葉であるが、人が道を究めるのに歩む3段階の創造の過程が示されてある。

「守」とは、師についてその流儀を習い、その流儀を守って励むこと。先輩や師から基本を教わり、型をまねていくことから始まる。「守」はコツコツ努力することが必要になり、すぐには効果が現われないので苦難の時期となるが、ここを避けては通れない。

「破」とは、あえて既知のセオリーに逆らってみる。師の流儀を極めた後に他流をも研究すること。守を修得して行く中で生まれた葛藤、自分ならこうするという思いで型にアレンジを加えていく。と同時に型から離れはじめていく過程。「型破り」という段階もあるが、型ができていなければ型は敗れないことを肝に銘じたい。

「離」とは今までのセオリーとは違う独自のセオリーを見つけること。完全に基礎の段階から離れて自分なりのオリジナルを確立する段階である。この段階になって初めて個性ができあがりプロフェッショナルとして周囲からも認められ、その道の実力者となる。

学問を究める、芸術作品を創り出す、スポーツのスキルを向上させ、新たな戦術をあみだすことは、古今東西同じような創造の過程を経て成し遂げられる。私の何よりの楽しみは、バスケットボールの指導や大学の授業において、新しいことを創造して相手を楽しませ、驚かせことである。爺はさらに砂漠荒野を目指さず。しかし、人生は短すぎる。